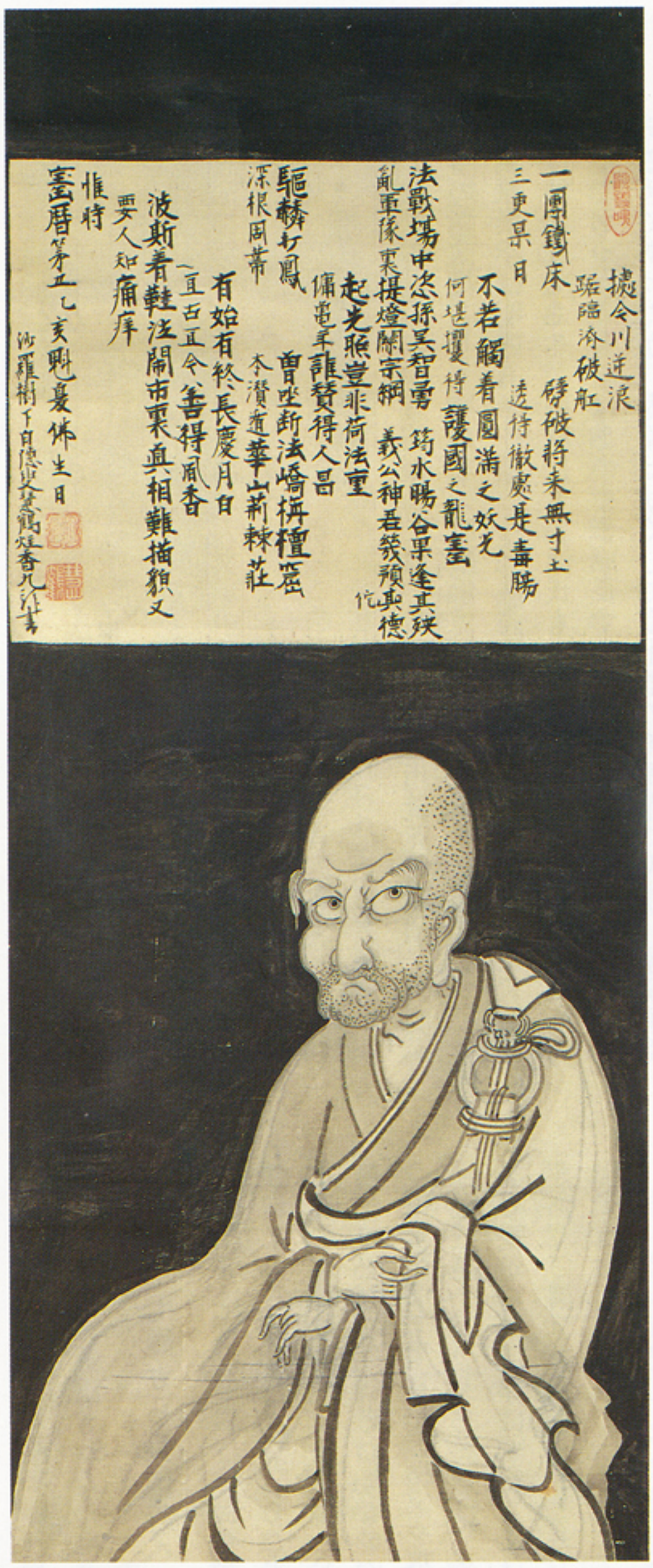
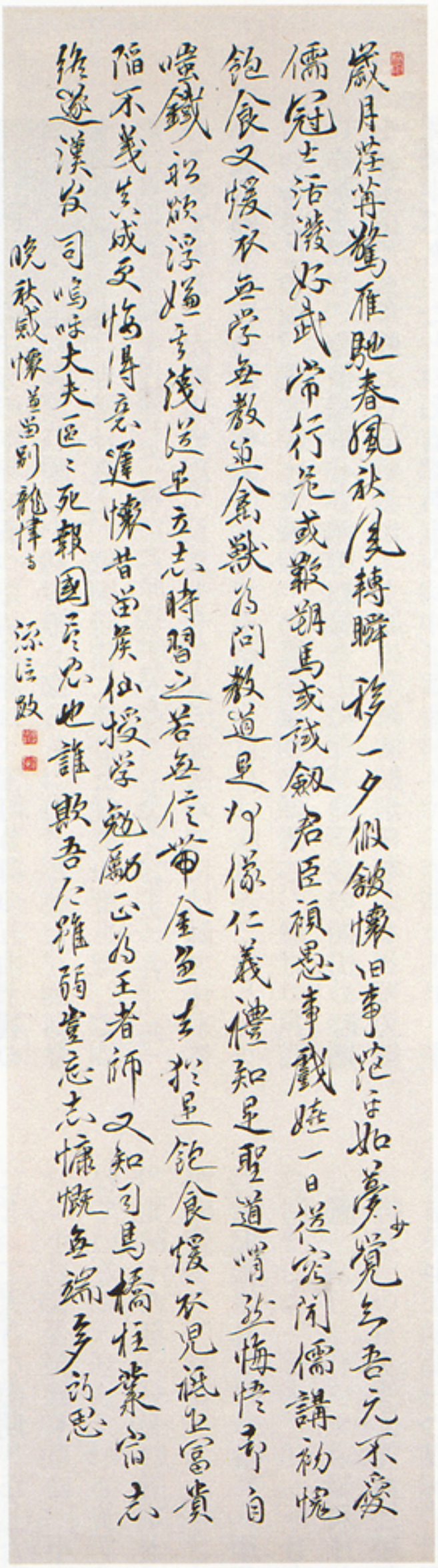
特別企画

小島（おじま）龍津寺（りょうしんじ）展

―小島藩主香華寺―



白隠筆「開山宝珠護国禅師（雪斎）頂相」宝暦５年（1755）



第10代 小島藩主 松平信敏（18歳）筆
「別離状」明治元年（1868）

清水市の東部を南北に流れる興津川に沿い、国道五二号線に並行するように通じる「身延道」と呼ばれた街道は、古くから甲州へとつながり、小島はその興津川の河口のほど近くに開かれた、小さな城下町として栄えました。

「小島藩」は江戸時代中頃に立藩された一万石の大名で、高台に「陣屋」を構えていました。今回紹介する臨済宗妙心寺派の龍津寺（りょうしんじ）は、もと「了心庵」と称し、鎌倉建長寺末で、開山は宝珠護国禅師（雪斎）とされ、天文年間（一六世紀中頃）のことと寺伝は伝えています。また、小島藩主松平家の庇護を受けた香華寺で、特に宝暦五年（一七五五）の開山二〇〇年遠忌に際し、白隠が招かれ維摩経を講じたことで知られています。この頃、白隠に帰依した藩主松平昌信は龍津寺を墓所に定めています。こうした小島藩との深い関わりなどを寺宝を通じてご紹介するものです。

龍津寺展によせて

常葉学園大学大学院教授
同　教育学部教授　川崎　文昭

龍津寺は臨済宗妙心寺派の寺院で、山号は拈華山である。開山は宝珠護国禅師で、開山の時期は天文年中（一五三二～五五）と伝えられている。

開山宝珠護国禅師

龍津寺の開山宝珠護国禅師とは、戦国大名今川義元の政治・外交・軍事の指南役として有名な太原崇孚（たいげんそうふ）雪斎（せっさい）である。

太原崇孚は明応五年（一四九六）庵原左衛門尉の子として生まれた。母は興津氏である。庵原氏も興津氏も、ともに戦国大名今川氏の有力家臣であった。太原はそのまま成長すれば武門の側面から今川氏を支える筈であったが、太原は幼くして富士郡の善得寺に入り、琴渓承舜のもとで剃髪、受戒して九英承菊と僧名を得て仏教の道を歩んだ。

善得寺で修行の後、京都の建仁寺に掛錫して勉学、修行したがあきたらず、妙心寺の大休宗休（円満本光国師）に参じ、修学に励んだ。師大休から印可をうけ、太原崇孚と称し、別号を雪斎とした。

龍津寺開山の時期

江戸時代、龍津寺の本寺であった清見寺は、宝町幕府の五山十刹の制のもとで、足利義満の頃は十刹の第七位にあった。しかし、足利幕府の衰退とともに寺勢は衰え、戦国時代になると荒廃の度を増していた。この清見寺を再興した僧が太原崇孚であり、天文八年（一五三九）のことである。太原はまた、天文十七年（一五四八）には師大休宗休を駿府郊外大岩の臨済寺開山として招請し、自らは臨済寺二世となっている。この間、承元寺・大乗寺・長福寺などを再興し、駿河の各地に寺院を開き、臨済宗妙心寺派の教線を広めた。龍津寺の開山の時期を寺伝は天文年間としているが、太原の宗教活動から考えると天文年間後半であったといえるであろう。

太原は天文十九年（一五五〇）三月、妙心寺に奉勅入寺し、弘治元年（一五五五）閏十月示寂した。六〇歳であった。宝珠護国禅師が後奈良天皇から追諡されたのは弘治三年（一五五七）三月である。

了心庵から良信寺へ

龍津寺は寛永十年（一六三三）の清見寺末寺帳に「了心庵」と記載されている。戦国時代の天文年間に、太原崇孚によって開かれた庵原郡小島の寺院は小規模な草庵として出発をし、確かな宗教活動を続けてきたのであろう。その後も衆庶の教化がなされ、江戸幕府の宗教政策（檀家制度）を背景に檀家を得て「庵」から「寺」へかわっていった。延宝三年（一六七五）の清見寺末寺帳には「良信寺」と記載されている。了心庵から良信寺にかわる間に歴代住持の営々とした寺庵維持の努力があり、清見寺から入寺した一磵座元の時に本尊像が建立され、一磵和尚は中興とされている。

龍津寺と小島藩

元禄十一年（一六九八）松平信治は庵原郡と有渡郡・安倍郡に五千石を加増され、それまで与えられていた五千石と合わせて一万石となり、信治は大名に列することになった。小島藩の成立である。この時、小島は小島藩領となり、宝永元年（一七〇四）には小島に陣屋が築かれた。小島藩の成立と陣屋が小島の地に営まれたことは龍津寺の歴史にとって大きな画期をなしたと考えられる。

「小島会合記録」には、小島藩と龍津寺の関係が次のように記録されている。

元禄十六年（一七〇三）十一月、陣屋構築の場所を家老神尾彦平らが検分

宝永元年（一七〇四）一月十六日、松平信治の奉行衆小島に到着
同　一月十八日　陣屋の地築工事開始
同　六月上旬　陣屋普請成就
同　七月十五日　松平信治御仏詣
享保十六年（一七三一）二月四日　より六月二十六日まで客殿再建工事　金二〇両を小島藩家中と領地村々喜捨

小島藩の動向、なかんづく陣屋の築造工事と成就に強い関心がそそがれており、ついには客殿再建に家中と領地村々から寄進があり、藩主松平家の龍津寺への庇護を知ることができる。龍津寺では松平信治の小島入部の際に良信寺を龍津寺に改め、松平家の菩提寺になったとしている。また、藩主信治を嗣いだ昌信の墓所は龍津寺にあり、昌信の墓塔は厚く護られている。

このように、小島藩の成立は龍津寺に大きな影響を与えた。小島藩成立直後の元禄十三年（一七〇〇）山門が建立され、享保十六年（一七三一）には客殿再建、宝暦五年（一七五五）には松平昌信は白隠慧鶴を龍津寺に招き維摩会を催している。小島藩の厚い庇護がなされ、以後、小島藩松平家の菩提所としての龍津寺となったのである。

今回の展示品には松平家寄進物である桔梗紋の小箪笥、松平家家老ら連署の「永代祠堂寄付山之事」の証文などもあり、松平家の龍津寺への帰依を知ることができる。

龍津寺と白隠慧鶴

龍津寺を語る場合、白隠慧鶴がこの寺で維摩会を催したことを忘れることはできない。

宝歴五年（一七五五）夏、小島藩主松平昌信は龍津寺に白隠慧鶴を招き、維摩会に自ら出席して法話を聞いている。白隠は三か月にわたって龍津寺に逗留し、「夜船閑話」下巻を著し、太原崇孚の頂相を描き、現在山門に掲げられている「拈華山」を墨書している。この維摩会の出席者名簿が「維摩経會衆籍」である。

白隠は周知のとおり日本臨済禅の中興の祖で、貞享二年（一六八五）駿河国駿東郡原（現在沼津市）の旅籠屋の三男として生まれた。幼くして出家を志し、十五歳の時に原の松蔭寺に入り得度した。その後各地に師を求めて歴参し、越後国高田の英巌寺性徹のもとで修行し、大悟した。しかし、信州飯山の正受老人道鏡（慧端）に参じ大悟の自負を打ち破られて、心機一転してひたすら修行した。その後も各地を放浪し、苦修を重ねた。そして、享保二年（一七一七）松蔭寺にもどり、以後、精力的な教化活動をおこなった。一切衆生がともに成仏することを説き、菩提心を実践し、明和五年（一七六八）松蔭寺で示寂した。八十四歳で遷化するまで五十四編の著作をなし、一万点におよぶ書画の墨蹟を残した。とくに気迫あふれる表現力は禅心を端的に紙上に活写したものである。白隠墨蹟を菩提心とともに心にとどめられれば幸いである。

なお、龍津寺の山号「拈華山」は「拈華微笑（ねんげみしょう）」に根拠をもっている。霊鷲山（りょうじゅせん）で説法した釈尊が、華を拈って大衆を見た時、摩訶迦葉（まかかしょう）がその意を悟って微笑したという説話から、心から心に伝えることをいう。人と人は、仏の道につながる真心と真心をもって心を通わせたいものである。

仏と縁を結ぶ

幼い頃「うそをつくと閻魔（えんま）さまに舌をぬかれる」という教えは誰もがうけたであろう。寺院にあっては地獄・極楽図（十界図）を盆会に開示して衆生済度を説くことがおこなわれる。凡愚の衆生、それは私自身であるが、殺生をし、他人より美味なる物を食べようとし、他をうらやみ、ねたみ、欲深く、威張る私は地獄に堕ちて苦しみ続けるのであろう。自らの日常を心底かえりみて、そのような邪心をおこした自己を反省し、恥じねばならない。常日頃、残念ながら毎日とはいかないが、仏の道にはずれていないか合掌して自己をふりかえれば、閻魔さまから極楽を認めていただけるであろうか。自己が生きてきた全てと、生きていく全てが閻魔帳に残ることを深くかえりみて生きたいと思う。

龍津寺展を参観される多くの方々がこれを機会に一層深く仏と縁を結ばれ、心底深く幸せを感得されることを切に願い、意義深い展示と感じていただければ龍津寺展協力者としてこの上ない喜びである。

龍津寺の美術

常葉学園短期大学助教授　日比野　秀男

静岡県の仏教寺院

静岡県下の寺院を展望してみると、歴史の流れと各宗派の盛衰とが密接に絡み合って今日に至っていることが良く分かる。

曹洞宗寺院は県西部に多く、日連宗寺院は富士市周辺から県東部に多く分布する。これは寺の数が多いか少ないかといった問題だけでなく、宗派の勢力分布あるいは文化遺産の多寡という問題とも絡み合っているのである。当然、平安密教寺院に仏像彫刻が多く伝えられているが禅宗寺院に宗派が変わってしまった寺も少なくない。

さて、臨済宗寺院は県中部に名刹が多い。特に静岡市の臨済寺、宝泰寺、清水市の清見寺などはよく知られ、龍津寺もその一つである。

龍津寺の美術

龍津寺は清水市小島に所在し、禅宗寺院としてのたたずまいをよく残している。参道、山門、本堂など寺の歴史をよく示していると云えよう。

龍津寺に今日伝えられている美術品が往時の寺の盛況を僅かに示してはいるが、必ずしもその全てとは云えないであろう。宝永元年（一七〇四）以降、小島藩松平家の香華寺となってからは寺は強力なスポンサーを得ることとなる。すでに元禄十三年（一七〇〇）には山門を建てているが、これも松平家の援助によるものであろう。

また、宝暦五年（一七五五）には中興開山・太原崇孚（宝珠護国禅師、今川義元の軍師、清見寺の開山）の二百年遠忌・維摩会の大法要を営んだのも松平家の絶大な庇護があったからであろう。特に三代藩主・昌信は禅への帰依があつく、当時の住職石鼎和尚に師事した。そして石鼎和尚は白隠の高弟でもあったことから中興開山の遠忌の導師として白隠に依頼したものであろう。

さて、今日、龍津寺に伝わる美術品はこの宝暦五年（一七五五）の白隠禅師の遺品類といつの頃か不明ではあるが寄進された絵画とに分けられる。後者の絵画はいつだれが寄進したものかはっきりしないが松平家によるものかも知れない。

龍津寺と白隠禅師

宝暦五年春、白隠禅師が龍津寺に滞在した期間は三ヶ月間に及んだようである。この時、白隠禅師がのこした遺品類は次の通りである。

(1)　宝珠護国禅師頂相　一幅

龍津寺の中興開山・宝珠護国禅師（太原崇孚、雪斎）の肖像画。背景を墨で塗りつぶし左向きの禅師を描く。画上には、これまた白隠禅師の自筆の賛が書されている。禿頭、髭面でぎょろりと開いた目は何物をも見通すような鋭い眼光をたたえている。左手の上に右手を載せやや猫背で多分椅子に腰掛けた姿を描いたものである。二百年遠忌ということであるから当然白隠禅師は宝珠護国禅師の姿は見ていないのであるが、語録などから推定してこのような姿としたのであろう。

画上の賛は、これまた像主の伝歴を述べている。それによると、今川義元の軍師としての活躍、若い徳川家康の師としての様子などを述べ、いかにも戦国の世に於ける禅僧の活躍を述べている。

さて、この宝珠護国禅師の頂相（肖像画）は臨済寺（静岡市）にも所蔵されている。こちらの像は今川家が亡んだとき元の画も焼失してしまったので再度画き直したもののようである。

その他に白隠筆の達磨図が寺に伝わっている。その箱は二幅が入るもので、箱書には「維摩大師達磨大師独妙禅師画」とあり、もとは「維摩居士図」〈大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室蔵〉も収められていたようである。これまたバックは墨を一面に置き老貌の維摩居士を描いている。

維摩居士図
〈大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室蔵〉

(2) **扁額　一面**

山門に掛かっている額。拈華山とは龍津寺の山号である。この額の原本である書「拈華室」（白隠自筆、六〇・六×一三五・四　紙本墨書）も同じく龍津寺に伝来している。

(3) **當山維摩會中涅槃忌偈　一幅**

宝暦五年（一七五五）、白隠禅師が開いた維摩会で白隠が書した偈

(4) **白隠関連資料**

ア、宝珠護国禅師行状　一冊

白隠が著した宝珠護国禅師（太原崇孚、雪斎）の伝記を記したもので写本である。白隠が伝記についてよく調べたことが知られる。

イ、維摩経会衆籍

宝暦五年、維摩会に参集した人々の名簿。

ウ、見台と講台

白隠が使用したと伝えられる見台で、白隠が石鼎和尚に渡したものといわれる。其の外、同じく白隠が使ったと伝える講台がある。

(5) **釈迦十八羅漢図　対幅**

白隠の高弟・遂翁（一七一七～八九）の描いたもの。遂翁は下野国（栃木県）に生まれ、三十歳の頃、白隠に参禅し、松蔭寺（沼津市）を継いだ。彼の作品は繊細な線描に特色が有り、この作品も彼の画風をよく示すものである。

(6) **寒山拾得図　対幅**

禅宗の逸話の主人公、寒山と拾得を描いたもの。大胆な墨描の作品である。

其の外に、伝林良筆蘆雁図（絹本淡彩、一四八・三×八〇・七）などの水墨画も有る。

龍津寺近くの古城跡

岡部町立岡部小学校教諭　関口　宏行

横山城跡

別称として興津横山城又は興津城と称している室町期から戦国期まで存続した中世城郭である。

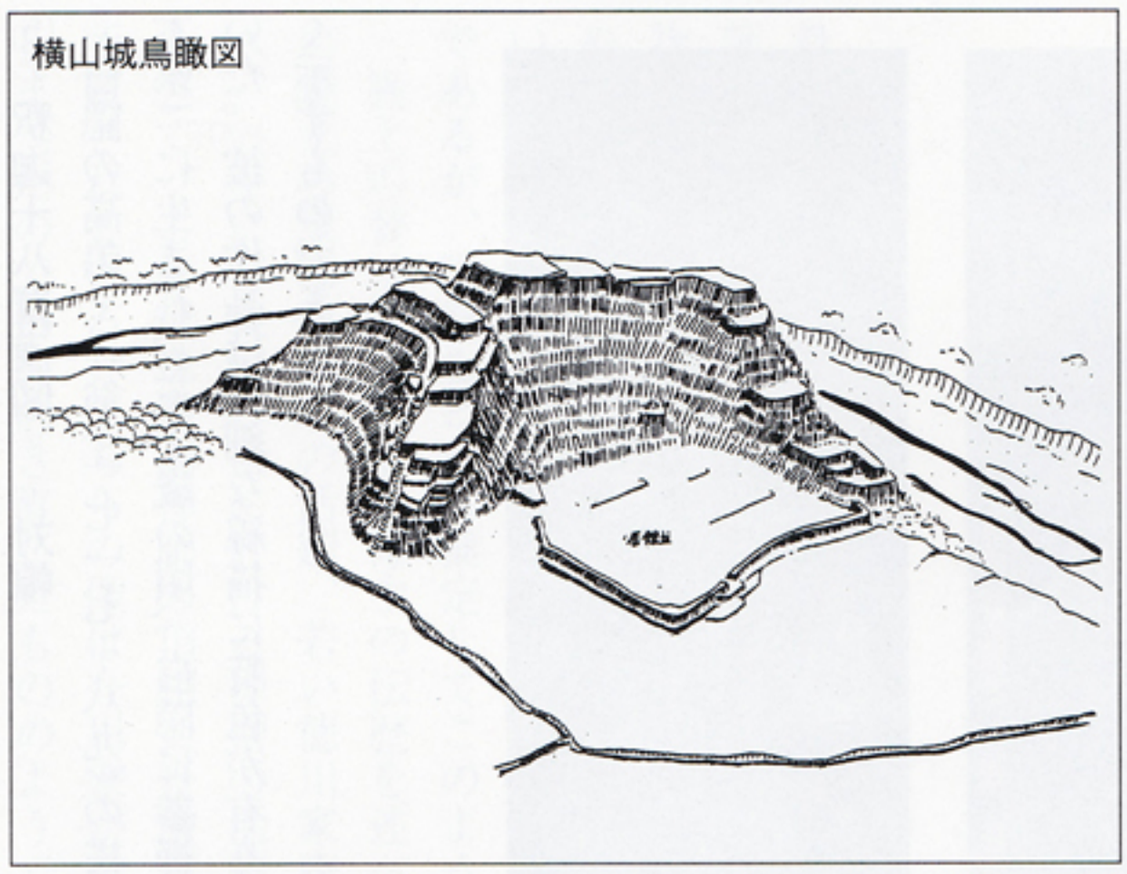
横山城は、古くから居住した開発領主興津氏代々の居城で、初期の居住地と推定される地より、現在地の谷津へ移転した時期は不明であるが、南北朝期以降とも伝えられている。興津氏の祖は、船越四郎大夫清房の嫡男で四郎維道といわれている。今川氏が駿河守護職として入府以来、その被官人となっていったことは古文書や記録類によって、その名を検出することができるようになる。延文年間には興津美作守、大永年間（一五二一～二八）には興津藤兵衛尉正信・興津彦九郎宗鉄の名が残されている。興津氏は連歌師の宗長とも親交があり、宗長は興津館に宗鉄を訪ね、連歌を行い、庭を眺望していることが『宗長日記』などによって判明する。天文三年（一五三四）今川氏輝は、興津藤兵衛尉正信の駿遠両国の知行分を安堵している。永禄十年（一五六七）、里村紹巴は、興津入道牧雲斎を訪ねて、城下にて連歌の興行をしている。

永禄十二年（一五六九）武田信玄が駿河に侵攻した時、後北条氏は今川氏真救援のため駿河に出兵した。十二月十三日に武田軍と北条軍が興津付近で交戦していることから、興津を本貫地とする興津氏は、去就に苦悩しながら撤退したとされる。一説に血脈の存続から、一族が武田氏、後北条氏等へ臣従したとも考えられる。横山城を接収した武田軍は、北条軍の侵攻を阻止するための拠点づくりとして横山城の増強に着手し、翌年の二月十一日に改修を完了した。これにより駿河と甲斐を結ぶ補給路の確保をした。二月下旬、興津川をはさんで薩埵山の北条軍と横山城に拠る武田軍は小競合を繰り返した。四月十九日に至り、武田信玄は、横山城将の穴山信君に城掟を与え橋頭堡の確保を命じている。四月下旬の武田軍の撤退後も城を堅守し、久能城と共に駿河支配に向けて重要な機能を果たすこととなった。武田軍の支城として江尻城を核としながら天正十年（一五八二）まで存続し、のち廃城となった。

城跡は、清水市の興津から国道一号線より分岐し、国道五十二号に入り、約三キロメートル北上した位置にある。興津川に突出した標高九十七メートルの山頂とその南麓に遺構を残す。山は独立しておらず、西側に堀切りを設け、後方を遮断した略連郭式縄張の戦国城郭である。現在、曲輪、土塁、堀切り、縦堀、庭園址、虎口等の遺構を実見できる。

横山城が、数多くある戦国城郭の中で、歴史的価値を高めているのは、南麓に設けられた城番の居屋敷を含めた屋敷群や武器庫、米蔵等を含む城郭諸施設を防御するため、東端の山裾から南を通り西方へ向けて築かれた巨大な土塁である。平面形状は、鎹状を示し、基本的には、平地における方形館の形態を示していると考えられる。なお南側中央部の虎口前面には、大規模な馬出しが存在した可能性が、最近の調査で判明した。巨大な土塁によって囲まれた空間は、根小屋を形成した部分であり、縄張の特徴を示している。即ち横山城は、山上の詰の城と、山下の根小屋が、セットになって遺存している典型的な戦国城郭である。従って現在実見できる山上の諸曲輪、堀切り、山下の遺構は、興津氏築造のものでなく、武田氏が改修した結果の所産物であるがその祖形は、興津

横山城鳥瞰図



氏による経始である。

土塁を南縁にもつ本曲輪は、山頂の中心部に構えられ、前後に段差をつけて数郭を付属させ、西側は堀切りを一本入れて、西曲輪を設置した。西曲輪より尾根は二つに分かれ、南側に延びる主尾根上に三つの小曲輪を設けた。

南麓を囲む土塁は、長さ約二百メートル余に及んでいるが、過去の部分発堀によって興津氏時代の土塁が下層より検出されていることから武田氏は、この土塁上に更に盛土をして改修していることが判明した。興津氏在城時にはこの土塁の外方に堀を巡らしていたようだ。

虎口は、大土塁のほぼ中央にあって、大手口とし、西側にも設置されたが、こちらは、喰い違い虎口の形態をしていたと考えられる。

小島陣屋跡

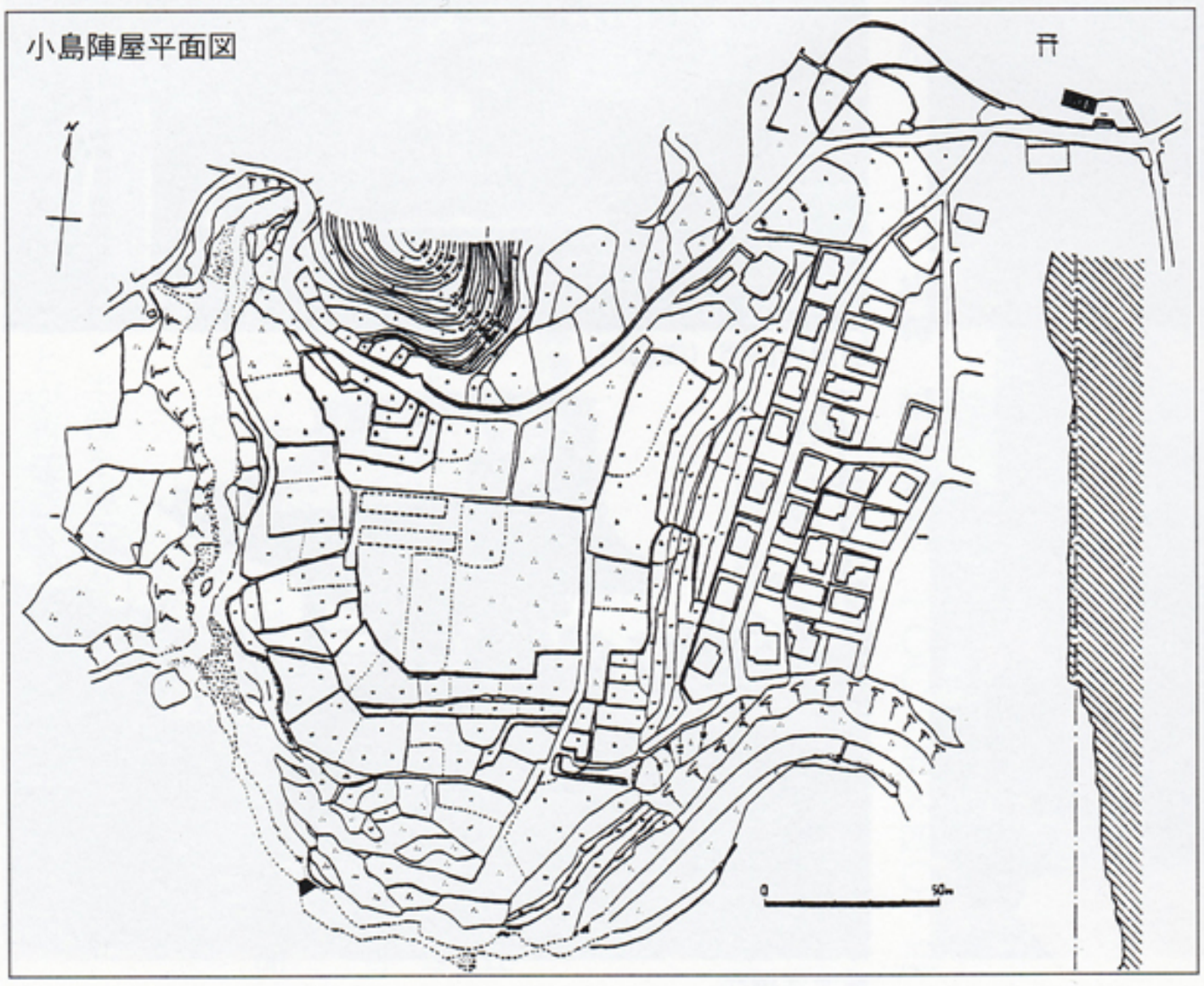
清水市小島町構内に位置する江戸時代の陣屋跡である。江戸中期頃に、譜代の松平氏が旗本から累進して一万石の大名に昇格した。そこで松平氏は陣屋を小島に構築し、以後約百六十年の長期にわたり、転封もなく居住した。

陣屋は、本来武士達が集結している場所で軍営であるが、江戸時代になると、旗本が知行地に設置した役所なども呼称するようになり、又城郭を築くことのできない小藩の居所としても使用されるようになった。

小島藩松平氏の祖は、十八松平の一つである三河国（愛知県）加茂郡松平町滝脇の城主松平乗清である。初代乗清から四代まではその系譜や人名等は不詳である。五代正勝の時、徳川家康に臣従して旗本となり、書院番を務め、上総国と常陸国の両国で千二百石を領した。正勝の養子となった重信の時、書院番頭から大番番頭、そして駿府城代に就任した。その際従来の知行地に加え、駿河国安倍郡、庵原郡、有渡郡の三郡が加わった。重信の子の信孝（のぶなり）の時若年寄（元禄二年）に昇進し、四千石の加増を受け一万石となり大名に列した。養子となった下野守信治は、知行地をすべて駿河国有渡・庵原・安倍の三郡に移した。陣屋を小島村に構えたのは、宝永元年（一七〇四）である。立藩したのは信治の代であるため、信治を初代小島藩主とみなしてよいだろう。

信治以後、信崇（のぶたか）・昌信（しげのぶ）・信義（のぶのり）・信圭（のぶかど）・信友（のぶとき）・信賢（のぶやす）・信進（のぶゆき）・信書（のぶふみ）と続き、十代信敏（のぶとし）に至って明治維新を迎えた。しかし明治元年（一八六八）徳川家達（いえさと）が駿河・遠江七十万石を領し、静岡藩を成立させたため、信敏は、姓を滝脇に復姓して千葉県に移封し、上総国望陀郡（木更津市）桜井に居所を定めて桜井藩を起こした。桜井藩は、明治四年（一八七一）廃藩となり、藩領は、桜井県・木更津県を経て、千葉県に編入された。

陣屋跡は、小島の集落と国道五十二号線を見下ろす西側の段丘上にあって、別当沢（べっとうさわ）が北より南に流れ大きく蛇行して東に向かい、やがて、興津川に合流する。陣屋は、東西約百五十メートル、南北百五十メートルの規模で、段丘東方下の馬場と段丘上の藩庁と屋敷群等から構成されている。全体の形状は、図にあるように、地形の制約を受けて、



平地の陣屋形態のような方形でなく、略馬蹄形の陣屋である。北から南へ降下する傾斜地であるため、南側に石塁を巡らし、水平面の敷地を多数造成した。中央部に、他の平面地と比較して不釣合いなほど広い面積をもつ不等辺九角形の平面が存在する。藩庁の中心的な建造物のあった御殿の跡と推定されている場所である。明治期に学校が設置され、若干拡張部分を含むものの、旧藩時代の遺構が大部分を占める。石塁の線が曲折しているのは、地形や構造のみならず信仰面との関連が考えられる。この御殿の地の周辺は、石塁をもって区分された小規模な平面区画がほぼ放射状に南面から西面に向けて設けられている。小区画と建造物との関連は、当時の陣屋の図面が未発見なため、検討されていないが、今後、陣屋内の建造物の配置状況等を解明するにあたっては精査課題の一つである。

近世大名の陣屋というと、大型の武家屋敷造りというイメージが強く、土塁や土塀を設けて、その外方に水堀を巡らしても狭く浅い場合が多い。しかし小島陣屋の場合は、平地でなく段丘上に構え、石垣を随所に多用していること。総石垣造りの感じがする。表門は単なる冠木門でなく、内桝形の形態をとり、その位置は、沢に近く、防御を想定した機能をもっていることが特徴である。石積工法は、切り込みハギと打ち込みハギをきちんと意図的に使い分けており、表門から北側に延びる石塁は、堅牢であり、切り込みハギの曲線は見事である。又屋敷割の主要部に設置された排水溝は、小規模ながら精巧にできている。こうしたことから陣屋の構築法は、特例に属し、陣屋というより、構造、機能面でも小城郭と同一であるといっても過言ではない。城郭は幕府法により五万石余以上でないと、新規の築城は許可をされていない。わずか一万石の譜代大名松平氏が幕府の許可を得ての構築とはいえ、城郭と酷似した陣屋の着工の裏には、松平氏と幕府に何らかの強い政治的関連性があったものとみてよいのではないか。真のねらいは、何だったのか、当時の幕藩体制を反映したものか興味深い問題と同時に、今後追究しなくてはならない重要課題の一つであると言えよう。

龍津寺方丈

龍津寺山門（四脚門）

龍津寺馬屋

龍津寺鐘楼

資料解説（抜粋）

三　開山宝珠護国禅師頂相〈清水市指定文化財〉　白隠筆

掛軸　紙本墨画　一〇四・六×四四・〇

宝暦五年（一七五五）魁夏（旧暦四月）八日の日付をもつ雪斎の頂相。太原崇孚雪斎（一四九六～一五五五）の父は庵原左衛門尉、母は横山城主興津藤兵衛尉正信の娘であり、今川家の軍師として名を馳せた。天文年間には興津清見寺の住職を兼ね、その結果、龍津寺をはじめ承元寺や大乗寺などの清見寺末の寺には雪斎を開山とする寺が多い。

この雪斎頂相は、小島藩主松平昌信が大壇越となり開催された二〇〇年遠忌に招かれた白隠（一六八五～一七六八）が描いたもの。白隠七一歳の作品で、厳しい表情が表れている。

拠今川逆浪
踞臨済破舡
一団鉄床　擘破将来無寸土
三更　目　透得徹擢処是毒腸
不若触着円満之妖光　何堪捜得護国竜宝
法戦場中恣孫呉智男　水筠谷果逢其殃
起先照豈非荷法重　義公神君幾預陀徳
傭亀年誰賛得人昌
駆麟打凰　曽坐断法栴檀窟
深根固帯　本潜遁華山荆棘荘
有始有終長慶月日
亘古亘今善得風香
波斯著鞋泣閙市裏　真相難描貌又
要人知痛痒
惟時
宝暦第五乙亥魁夏仏生日
沙羅樹下白隠叟白慧鶴炷香九拝書

四　臨川和尚頂相

掛軸　絹本著色　一〇〇・五×四〇・三

臨川和尚は、天和元年（一六八一）に生まれ、宝暦三年（一七五三）七三歳で歿している。享保一八年（一七三三）には方丈を再建した。箱書によれば、寛保三年（一七四三）に京都御幸町通誓願寺上ルの早水喜円が描いたことがわかる。

五　石鼎和尚頂相　梅嶽東郁（龍津寺第四世）筆

掛軸　絹本著色　一〇四・七×四一・五

享保二年（一七一七）三河に生まれる。はじめ金地院（細江町）で修行し、のちに松蔭寺の白隠の弟子となる。宝暦元年（一七五一）龍津寺に入寺する。

宝暦五年（一七五五）の開山二〇〇年遠忌に白隠を招き、維摩会が開催され、小島藩主昌信と白隠が出会って「夜船閑話下巻」が著されるきっかけとなる。

明和四年（一七六七）には梵鐘・半鐘を鋳造し、安永五年（一七七六）には龍津寺が小島会合頭であることが再確認されている。

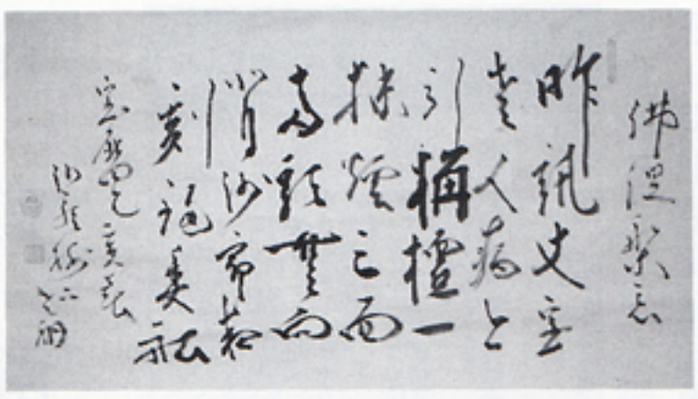
小師東郁画余陋質請賛辞
述以塞厥需日
咄　箇醜面皮　画工躇眼目
拈弄無毛払　塊坐破曲彔
指槐罵柳　呼馬為鹿
生涯捏大虚空
滅却宗猷　多面辱
咦
桃紅李白任人看　不許前川石禄々
惟旨天明二壬寅臘八
剛石鼎穹書干微笑室

六　唐山和尚頂相　掛軸　絹本著色　一二四・〇×五四・二

唐山道基和尚は文化八年（一八一一）生まれ。永見寺に隠居していた万延元年（一八六〇）に藩主の招聘を受けて入寺し、明治一二年（一八七九）歿。

維新の前後は、権大講義に補せられ、活躍した。

明治元年（一九六八）には小島藩が千葉県の桜井へ転封し、龍津寺は藩主の香華寺を終わる。



二四　當山維摩會中涅槃忌偈〈清水市指定文化財〉　白隠筆　掛軸　紙本墨書　三一・四×五六・八

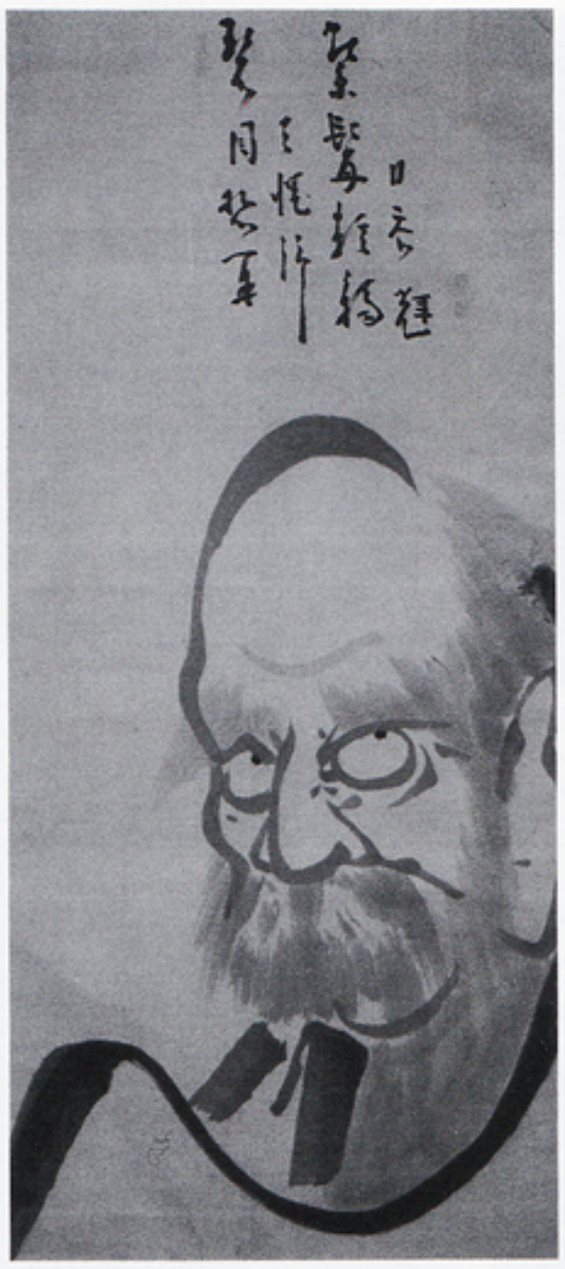
「偈」とは仏や仏法を賛美した韻文体の経文で、四句からできている。

この偈は「宝暦乙亥春」の紀年をもち宝暦五年（一七五五）に開催された維摩経会で白隠が誦えた。

昨訊丈室老人病
今引梅檀一株煙
三面両頭無向背
沙郎夜刻釣魚船
宝暦乙亥春　沙羅樹下老人衲

二六　見台　〈清水市指定文化財〉　六四・〇×二四・〇×五六・六

明和五年（一七六八）一二月に、師の白隠が示寂したのに際して、遺品として石鼎和尚に贈られた白隠愛用の見台。



三〇　達磨図　白隠筆　掛軸　紙本水墨　一二五・七×五五・八

白隠は数多くの達磨像を描いている。これが納められていた箱の面には「維摩（ゆいま）居士図」の名が連著されていて、かっては同梱されていたことがわかる。

一　維摩経會衆籍　〈清水市指定文化財〉
冊子　紙本墨書
二九・四×二〇・七×〇・七

開山二〇〇年遠忌に開催された維摩会の参加者名簿。

僧呂や武士ばかりでなく、山梨了徹（庵原）などの名も見え、白隠の賛同者が有力農民にもおよんでいたことがわかる。

二　宝珠護国禅師行状　〈清水市指定文化財〉
白隠撰　冊子　紙本墨書
二七・〇×一八・四×〇・六

雪斎の伝記。宝暦五年に開催された開山二〇〇年遠忌で白隠は雪斎頂相を描き、賛を添えたが、その画賛が冊子の後半を占め、最大な前半はその序文にあたる。奥書によれば明和二年（一七六五）の少林忌に石鼎和尚が白隠の撰文であると記しているが、誰の筆写によるのかは分からない。

三　山額「拈華山」　〈清水市指定文化財〉
白隠筆　扁額
一八九・〇×八三・三×五・〇

宝暦五年に開催された開山二〇〇年遠忌で白隠が揮毫した「拈華室」の書が寺に伝えられている。扁額「拈華山」の「拈華」と落款は、書の拈華と同一であり、書をもとに、あとから「室」を「山」に替えて木刻・胡粉を差し山額としている。

三四　講台〈清水市指定文化財〉　八四・〇×九〇・〇×一三七・五

宝暦五年に白隠は、維摩会を講義するが、その際に使用したとされる講義用の椅子。

三六　寒山拾得図（かんざんじっとく）　遂翁（すいおう）筆　対幅
掛軸　絹本墨画
一〇七・四×三九・七

鎌倉末期以降、漢画系や狩野派の画家達がよく画題にしたが、蓬髪（ぼさぼさ髪）で、いかつい顔の表情と何とも滑稽な動作には愛敬がある。この図は遂翁の作と伝えられていて、その力量がしのばれる。右図の経巻をひろげたのが寒山で、左図の箒を持ったのが拾得である。

寒山は中国天台山国清寺の、近くの寒厳に住んでいたので寒山と呼ばれ、拾得は国清寺の僧豊干（ぶかん）禅師に拾われたのでこの名がある。

梅嶽和尚が文化十二年（一八一五）に五代藩主松平信圭より拝領したもの

四〇　蘆雁（ろがん）図　伝林良筆　掛軸　絹本淡彩　一四八・三×八〇・七

いづれの経路で入手したものか判明していないが、箱書に文政十三年（一八三〇）、固閑和尚の時代に寺へもたらされたものとされている。

林良とは、中国明時代中期（十五～十六世紀）の画家で広東の人。南宋画院の伝統を受け継ぎ、花果、鳥を得意とした。とくに水墨の鳥、樹石を好んだが、その筆使いの力強さは草書に通じ、生き生きとしている。同時代の呂紀（りょき）と並んで名高い。

四五　陣屋絵図　紙本著色　七八・八×八〇・二

小島藩は一万石の大名であったので、城を持つことが許されず、その居所は陣屋と呼ばれていた。しかし、寺の北西に位置する陣屋は、幾段にも累々と石垣を廻し、その石垣も「切り込みはぎ」を主体とした堅牢なつくりである。地元に伝わる陣屋絵図はいずれもよく似ており、現存する御殿と絵図の記載を比較してもかなり正確であり、建物の配置等も正確に伝えられているようである。これは明治時代になってからの写しであり、彩色されている。

四九　別離状　松平信敏筆　紙本墨書　一〇九・四×三〇・〇

最後の小島藩主である当時一八歳の松平信敏が、明治元年一一月に唐山和尚に差し出した別離の書。

格調の高い七言古詩で感謝と共にこれからの決意をあらわす。

五四　須弥山（しゅみせん）儀　〈清水市指定文化財〉　源直恭作　欅材　八五・〇×七六・〇

天体の運行のみならず万物世界の中心たる須弥山をかたどった和時計。須弥山の周囲を月日が運行するという思想に基づいて文政七年（一八二四）に作られている。駿府城から宝台院に移り、明治一〇年に唐山和尚が寺に納めた。併せて、共に版画の「天竺輿地図」（文政一一年）、「世界大相図」（文政四年）、「閻浮提面附日宮図」も納められた。

六〇　赤茶腕　一元作　径一一・八　高八・〇　高台径四・五

楽家四代一入（いちにゅう）の妾腹の子で、京都・南山城に楽の脇窯として玉水焼を始める。作品の多くは無銘であるが、稀代の妙手として一時期その名を馳せた。享保七年（一七三三）六十一歳で没。

箱書に「一元赤茶腕、木々の雫（しずく）」とあり、表千家九世の了々斎宗左とおぼしきが認（したた）めている。

第十代藩主松平信敏が桜井へ転封の折、龍津寺に寄贈したもの。

小島藩主歴代一覧

	姓名	生年～没年	没年令	官位	家督継承日	葬地
一	松平信治（のぶはる）	延宝元～享保九（一六七三）（一七二四）	五二才	下野守	元禄三・一二	英信寺
二	松平信嵩（のぶたか）	宝永七～享保一六（一七一〇）（一七三一）	二三才	安房守	享保九・四・二二（一五才）	西福寺
三	松平昌信（しげのぶ）	享保一三～明和八（一七二八）（一七七一）	四四才	内匠頭 安房守	享保一六・九・二三（四才）	龍津寺
四	松平信義（のぶのり）	寛保二～享和元（一七四二）（一八〇一）	六〇才	丹後守	明和八・八	英信寺
五	松平信圭（のぶかど）	安永五～文政三（一七七六）（一八二〇）	四五才	采女正	寛政一二	英信寺
六	松平信友（のぶとも）	寛政九～弘化五（一七九七）（一八四八）	五二才	豊前守	文化一二・三	西福寺
七	松平信賢（のぶやす）	文化五～明治六（一八〇八）（一八七三）	六六才	丹後守	天保七・五	西福寺
八	松平信進（のぶゆき）	文化一〇～文久三（一八一三）（一八六三）	五一才		嘉永四・四	英信寺
九	松平信書（のぶふみ）	弘化三～元治元（一八四六）（一八六四）	一九才	丹後守	文久三・三	英信寺
一〇	松平信敏（のぶとし）	嘉永四～明治二〇（一八五一）（一八八七）	三七才	丹後守	元治元・八	英信寺

晩年の白隠と清水

延享三（一七四六）
山梨平四郎治重が白隠のもとに来参する

寛延三（一七五〇）
草ヶ谷高部山大乗寺で碧巌録（第一回）を講義する

宝暦一（一七五一）
草ヶ谷高部山大乗寺で碧巌録（第二回）を講義する

宝暦三（一七五三）
山梨平四郎治重に慈運了徹の道号を授ける

宝暦五（一七五五）
小島拈華山龍津寺で維摩経を講義する

宝暦六（一七五六）
入江澍林山慈雲寺で宝鏡三昧を講義する

宝暦一二（一七六二）
草ヶ谷高部山大乗寺で心経著語、碧巌録（第三回）を講義する

宝暦一三（一七六三）
草ヶ谷高部山大乗寺で碧巌録を講義する

明和四（一七六七）
入江澍林山慈雲寺で松源録を講義する

明和五（一七六八）
江尻白華山禅叢寺で大灯録を講義する
山梨佐助に「印可証」（既に飯塚佐助のとき「龍杖」授与）を渡す
草ヶ谷高部山大乗寺で三日間演法する
興津清見寺町清見寺で五日間演法する

松平昌信墓塔

出品目録

注（☆展示替えをいたします。期間は次のようになります。
A—三月二三日～四月七日　B—四月九日～四月二一日
C—四月二三日～五月一二日　無記入—展示替えをいたしません）

【No】	【品名】	【作者】	【材質・形状】	【寸法（センチ）】（縦×横×高）	【展示期間】
	龍津寺の歴史とおしえ				
一	境内絵図		紙本墨書 一枚	五四・〇×八五・四	
二	秋葉山棟札		木製 一個	六四・〇×二四・四×一・〇	
三	開山宝珠護国禅師頂相	白隠	紙本墨画 掛軸	一〇四・六×四四・〇	A・C
四	臨川和尚頂相	白隠	絹本著色 掛軸	一〇〇・五×四〇・三	A・C
五	石鼎和尚頂相	梅嶽	絹本著色 掛軸	一〇四・七×四一・五	B
六	唐山和尚頂相	梅嶽	絹本著色 掛軸	一二四・〇×五四・二	B
七	追贈東堂職状　明治一二年		紙本墨書 一枚	四〇・〇×五二・〇	
八	不動尊像	伝空海	紙本著色 掛軸	五九・〇×二七・二	
九	牡丹下骸骨図		紙本著色 掛軸	七九・〇×二七・一	
一〇	住拈華山奉賀偈		紙本墨書 一枚	三〇・〇×四九・四	
一一	遷化偈		紙本墨書 一枚	二四・〇×三四・八	
一二	十界之図　文化一一年		紙本著色 掛軸	各一三六・六×五八・〇	
一三	名寄帳　元和七		紙本墨書 冊子	二九・四×二〇・二	
一四	宗門檀那請合掟　慶長一八年		紙本墨書 冊子	三二・〇×二一・二	
一五	小島会合掟　安永七年		紙本墨書 一枚	三四・〇×六九・八	
一六	小島会合記録　安永五年		紙本墨書 冊子	二六・六×一六・〇×〇・九	
一七	寺内人別書　慶応四年		紙本墨書 一枚	二七・〇×五三・三	
一八	殿堂須知		紙本墨書 冊子	二四・八×一六・六×〇・六	
一九	勤行回向　明治一二年		紙本墨書 冊子	二二・六×一五・八×〇・四	
二〇	年中覚書　安永四年		紙本墨書 冊子	二五・〇×一七・六×〇・七	
二一	年中行事　嘉永四年		紙本墨書 冊子	二六・〇×一八・〇×〇・二	
二二	年中行事　文久一年		紙本墨書 冊子	二七・〇×一八・〇×一・〇	
二三	日黄白記　天保一〇年		紙本墨書 冊子	一九・八×一四・四×一・〇	
	白隠と龍津寺				
二四	當山維摩會中涅槃忌偈	白隠	紙本墨書 掛軸	三一・四×五六・八	A・C
二五	夜船閑話下巻（複製）		木製	六四・〇×二四・〇×五六・六	
二六	見台	白隠	紙本墨書 掛軸	八二・八×一二・六	
二七	一行書「秋葉山大権現」		木製 二枚	一三・二×四八・〇×二・〇	
二八	版木（お経）				
二九	維摩居士図（写真パネル）		（原本は大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室蔵）		
三〇	達磨図	白隠	紙本水墨 掛軸	一二五・七×五五・八	A・B
三一	維摩経會衆籍　宝暦五年		紙本墨書 冊子	二九・四×二〇・七×〇・七	
三二	宝珠護国禅師行状	白隠撰	紙本墨書 冊子	二七・〇×一八・四×〇・六	

三三　山額「拈華山」　〈清水市指定文化財〉　白隠　扁額　木製　八三・三×一八九・〇×五・〇　八四・〇×九〇・〇×一三七・五

三四　講台　〈清水市指定文化財〉

龍津寺の絵画

三五　釈迦十八羅漢図　遂翁　絹本淡彩　掛軸　各九七・八×三八・八

三六　寒山拾得図　遂翁　絹本墨画　掛軸　各一〇七・四×三九・七

三七　古木鴟鴞図　伝雪村　紙本水墨　掛軸　二五・〇×二八・四

三八　柳燕図　随川岑信　絹本著色　掛軸　一一六・〇×五一・〇

三九　芦雁図　鈴木松年　紙本淡彩　掛軸　一二三・〇×三〇・八

四〇　蘆雁図　伝林良　絹本淡彩　掛軸　一四八・三×八〇・七

四一　峨眉烟雨図　林羅山　絹本水墨　掛軸　七五・八×三八・〇

四二　書　紙本墨書　掛軸　一三〇・六×四九・〇

小島藩と龍津寺

四三　鬼瓦（小島陣屋）　土製　四〇・〇×七二・二

四四　高札　木製　四一・〇×八三・四

四五　陣屋絵図　紙本著色　一枚　七八・八×八〇・二

四六　閻浮提面附日宮図　紙本著色（版画）　一三〇・〇×五六・四

四七　世界大相図　紙本著色（版画）　一三〇・八×五六・四

四八　天竺輿地図　紙本著色（版画）　一三〇・四×五七・二

四九　別離状　紙本墨書　掛軸　一〇九・四×三〇・〇

五〇　大乗妙典　木版雲母引　折本　三九・二×三二・三

五一　小箪笥　黒漆塗　四〇・二×三四・〇

五二　黒漆二枚胴具足・鎧櫃　黒漆塗　鎧　四〇・五×一六二・三×五一・五

五三　寺領絵図　紙本著色　二〇六×二八三

五四　須弥山儀　文政七年　〈清水市指定文化財〉　源直恭　欅材　和時計　八五・〇×七六・〇

龍津寺の彫刻と什物

五五　十王像他（一三体）　寄木造　閻魔王像高三九

五六　蓮月尼短冊　紙本墨書　短冊　三六・〇×六・〇

五七　青貝入硯蓋　本漆塗　硯箱　二七・〇×四五・四×三・四

五八　柄鏡　白銅　径二〇・二　柄長一一・二

五九　金中啓　紙本　三二・四×九・〇×一・二

六〇　赤茶碗　陶器　一元　高八・〇　径一一・八　高台径四・五

六一　小島藩分限帳　明治一年（複製）

六二　版木「佛説血益経録」　桜材　二二・六×三一・八×一・八

六三　一絲国師短冊　紙本墨書　掛軸　三四・五×五・四

六四　燭台　鉄製　台径二一・二　高五九・〇

六五　茶壺　陶器　径三五・〇　高四〇・五

六六　半鐘　青銅製　五六・五×三五・〇

歴代住持略年譜

宝珠護国禅師 大原崇孚雪斎 （開山）	天文年中 弘治一（一五五五）	了心庵として再興 遷化
仁峰座元		
松外座元		
久翁座元		
一磵座元 （中興）		清見寺より入寺、本尊像造立
台州守盤和尚 （法系第一世）	元禄四（一六九一）	八月入寺、清見寺芝岸大和尚より分法
	元禄一三（一七〇〇）	山門建立
	元禄一六（一七〇三）	小島藩陣屋の地を見分
	宝永一（一七〇四）	七月小島藩主松平丹後守信治を迎える、領地内諸寺と挨拶、「龍津寺」と称し香華寺となる
臨川元祚和尚 （法系第二世）		方丈再建（神尾政員、阿部有昌、堀池信孝ら発起） 小鐘鋳造
石鼎道剛和尚 （法系第三世）	宝暦一（一七五一）	入寺（白隠から常用の見台を賜与される程に参禅）、大乗寺碧巌録会で役となる
	宝暦五（一七五五）	開山宝珠護国禅師二〇〇年遠忌で白隠滞在（二月～四月） 松平安房守昌信が大檀越となり、白隠「維摩会」で講義する 「宝珠護国禅師画像・賛語」を描く
	明和四（一七六七）	梵鐘鋳造、鐘楼建立
	明和八（一七七一）	松平安房守昌信死去、龍津寺が墓所となる
	安永九（一七八〇）	隠居
梅獄（せんがく）東郁和尚 （法系第四世） （再中興）	安永一〇（一七八一）	入寺
	寛政六（一七九四）	庫裏、玄関再建
	寛政九（一七九七）	大般若経六〇〇巻が納められる
	文化一（一八〇四）	碧巌録会を開く 山林田畑五十余歩を買い付ける 諸堂修理料として百余両残す
宏岩元彌和尚 （法系第五世）		
固閑智堅和尚 （法系第六世）	文政五（一八二二） 安政七（一八六〇）	入寺 土蔵建立
唐山道基和尚 （法系第七世）	万延一（一八六〇） 明治一（一八六八）	入寺　松平丹後守の後援で招請される 一一月松平信敏が桜井へ転封される
暫く無住		
献獄宣泰和尚 （法系第八世）	明治二七（一八九四） 昭和一九（一九四四）	入寺 遷化

特別企画　小島龍津寺展

会　期　平成八年三月二十三日～五月十二日

会　場　フェルケール博物館

主　催／㈶清水港湾博物館
　　清水市教育委員会

後　援／静岡県教育委員会
　　静岡新聞社・ＳＢＳ静岡放送

協　賛／鈴与グループ